

飯田市美術博物館 2028 ビジョン・基本プラン 後期計画(素案)



平成 29(2017)年4月1日策定

令和 3(2021)年4月1日改訂

令和 7(2025)年4月1日改訂

目 次

はじめに	1
第1章 飯田市美術館 2028 ビジョン・基本プランの策定について	2
1. 策定の趣旨	
2. 飯田市美術館 2028 ビジョン・基本プランの位置づけと構成	
3. 計画の期間と進行管理	
4. 飯田市考古博物館について	
第2章 飯田市美術館の歩み	4
1. 飯田市美術館の基本テーマと活動方針	
2. 飯田市美術館の概況と主な沿革	
3. 飯田市美術館を取り巻く状況の変化	
4. 飯田市美術館の活動の成果と評価	
第3章 飯田市美術館 2028 ビジョン	9
1. めざす姿	
2. 重点目標	
3. 学芸活動の取組方針	
4. 各分野のテーマ・活動方針と重点的な取組	
第4章 飯田市美術館 2028 基本プラン	21
1. 調査研究	
2. 資料の保存収集	
3. 展示公開	
4. 教育普及	
5. 学芸活動の体制	
6. 管理運営業務	
第5章 飯田市美術館 2028 基本プランの展開	28
1. 前中後各期の達成目標と重点的な取組	
2. 後期 4 年間(令和 7～10 年度)の主な取組と活動指標	
【別表】	■
開館からの各分野の主な展示の開催状況一覧	
【参考資料】	■
1. 策定の経過	
2. パブリックコメントについて	
3. 協議会・評議員会などからの意見とその対応について	

はじめに

博物館の目的は、「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーションなどに資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすること(博物館法第2条)」です。

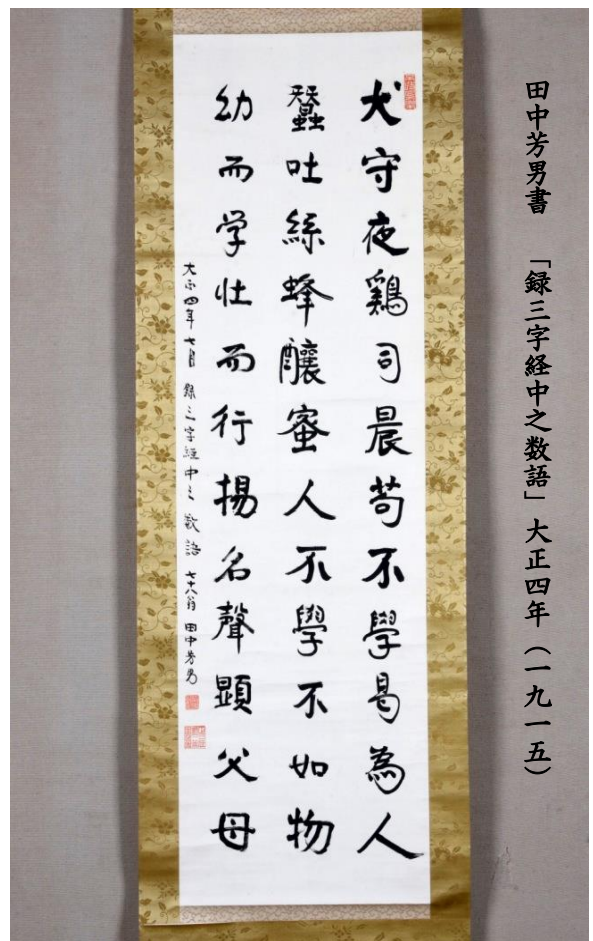
わが国の博物館の始まりは、明治5年(1872)に、東京の湯島聖堂に開設された文部省博物館とされています。この博物館を実現した人物こそ、飯田出身の田中芳男です。博物学(本草学)と医学を学んだ田中芳男は、パリとウィーンで開催された万国博覧会に日本代表団の一員として参加し、その感動を胸に秘め、様々な文物の有用性を調査し、展示公開するとともに、わかりやすい図譜などを作成して広く知識や技術の普及に努めました。さらに、明治政府の官僚として全国各地を訪れ、農林漁業の発展のために実践的な指導も行い、殖産興業を通じてわが国の近代化に貢献しました。彼は、人々や社会が豊かになるために、博物学の成果を生かす実践を行ったのです。

田中芳男の思想と行動の背景には、幼い頃に父から学んだ「三字経」の教えがあるようです。彼は晩年、「録三字経中之数語¹」という書を揮毫しています。その内容をごく簡単に意識すれば、「生き物には世の中で果たす役割がある。人の役割はよく学んで、豊かな未来をつくることである。」というものです。また、彼は、身近にいた優れた先輩達からも多くのことを教えられ、手ほどきを受けたりして、学びの楽しさ、厳しさ、必要性を身につけました。

田中芳男が博物館に込めた思いを酌み取るとすれば、博物館の使命は、「事物をして雄弁に語らしめ(事物が持っている情報をいろいろな視点、角度から伝え)るために、調査研究・資料の収集保存・展示公開・教育普及といった事業(以下「学芸活動」という。)を行い、学術文化の発展に寄与し、もって人々の生活文化を豊かにして、未来の社会の創造に寄与すること」と言えるでしょう。

日本の博物館の父と言われる、田中芳男の出身地にある当館は、こうした人々を輩出した地域性(飯田らしさ)を、当館の基本テーマである「伊那谷の自然と文化²」・「自然と人間との融合」という視点から明らかにし、地域の未来の創造に寄与していく使命を有しています。

令和4(2022)年4月「博物館法の一部を改正する法律」が成立し、田中芳男らの礎をもとにした博物館法が70年ぶりに改正され、さらに深化した博物館にするために、新たな博物館登録制度へと移行されました。この機にあたり、これまでの当館の成果を礎に、時代が求める美術博物館へと成長させていきます。



¹ 録三字経中之教話(読み下し)「三字経」とは、中国の古典的な漢字の教科書のようなものである。
 犬守夜 鶏司晨(犬は夜を守り 鶏はあしたを司る) 苟不学 曷為人(いやしくも学ばずんば なんぞ人と為さん)
 蚕吐糸 蜂釀蜜(蚕さんは糸を吐き 蜂は蜜を醸す) 人不学 不如物(人学ばずんば 物にしかず)
 幼而学 壮而行(幼にして学び 壮にして行) 揚名声 顯父母(名声をあげ 父母をあらわし)

² 「伊那谷の自然と文化」という言葉は、昭和53(1978)年度に発刊された定住圏構想推進事業の「飯伊地域における文化の振興に関する調査報告書」の表題として用いられ、同時期に策定作業が進められた飯田市美術博物館の開館に向けた基本構想にも引き継がれた。また、飯田市教育委員会は、平成25年度に「伊那谷の自然と文化をテーマにした飯田市教育委員会における取組方針」を策定し、「伊那谷の自然と文化は、独自で、多様で、それぞれが奥深い特徴を有し、市民のふるさと意識の源であり、飯田の魅力を形づくる基盤となっている」という基本認識を示している。なお、ここでの「伊那谷」は、概ね天竜川流域の木曽山脈と赤石山脈に挟まれた一帯(伊那盆地)を指している。本書で当地域という場合は、概ね飯田下伊那を想定している。

第1章 飯田市美術博物館 2028 ビジョン・基本プランの策定について

1. 策定の趣旨

飯田市は今、人口減少、少子高齢化、財政の縮小、経済の停滞といった大きな課題への対応とともに、当地域に予定されている新幹線網及び自動車道の延伸による、人的交流や物流の交流体系の変革を見据えて、まちづくりを進めることが求められています。そこで、飯田市は、ほどなく迎える大交流時代において、私たちの暮らす地域が超大都市圏の中で埋没することなく、持続可能なまちづくりを進め、魅力を高めていくために、「いいだ未来デザイン 2028(飯田市総合計画・計画期間：平成 29(2017)年度から令和10(2028)年度までの 12 年間)」を策定しました。また、これを受けて、飯田市教育委員会も同期間の「第2次飯田教育振興基本計画」を策定しました。

これらの計画において、「伊那谷の自然と文化」がもつ独自性、多様性、奥深さは、ふるさとを愛する心と飯田の魅力を育み形づくっていく源として認識されています。また、「守るべきものと備えるべきもの」を学び考え、まちづくりに生かしていくことも重要な取組として位置づけられています。「伊那谷の自然と文化」・「自然と人間の融合」を基本テーマとして活動している当館は、こうしたことを踏まえて、まちづくりや多様化する学びの欲求に応えていくことが期待されています。

平成元(1989)年に開館した当館は35年を経過しました。資料収集、展示公開、教育普及、他機関との連携、それらの基盤となる調査研究を行い、その使命を果たすことで長野県南部の伊那谷の文化振興に寄与してきました。近年、当館を含め美術博物館を取り巻く情勢は短い周期で大きく変化してきており、その課題への対応が急務となっています。そこで、当館の今後のあり方や事業活動における基本的な方向を示すビジョンとそれを達成するための取組を示す基本プランとを策定します。

2. 飯田市美術博物館 2028 ビジョン・基本プランの位置づけと構成

「飯田市美術博物館 2028 ビジョン・基本プラン(以下「本計画」という)」は、「いいだ未来デザイン 2028」と、その教育分野の計画でもある「第2次飯田教育振興基本計画」とを上位計画とし、後者の社会教育機関別計画として位置づけられるものです。

本計画は、当館のめざす姿(今後のあり方)と、その実現に向けた学芸活動の基本方針および重点目標を示す「2028 ビジョン」と、それを達成するための取組を示すアクションプログラムとしての「2028 基本プラン」とで構成します。なお、「2028 基本プラン」は、時代の変化や、制度の改正などに対応するため、本計画の期間を前・中・後期の3期に分け、各期を迎えるごとに具体的な取組(ロードマップ)を定めることとします。

3. 計画の期間と進行管理

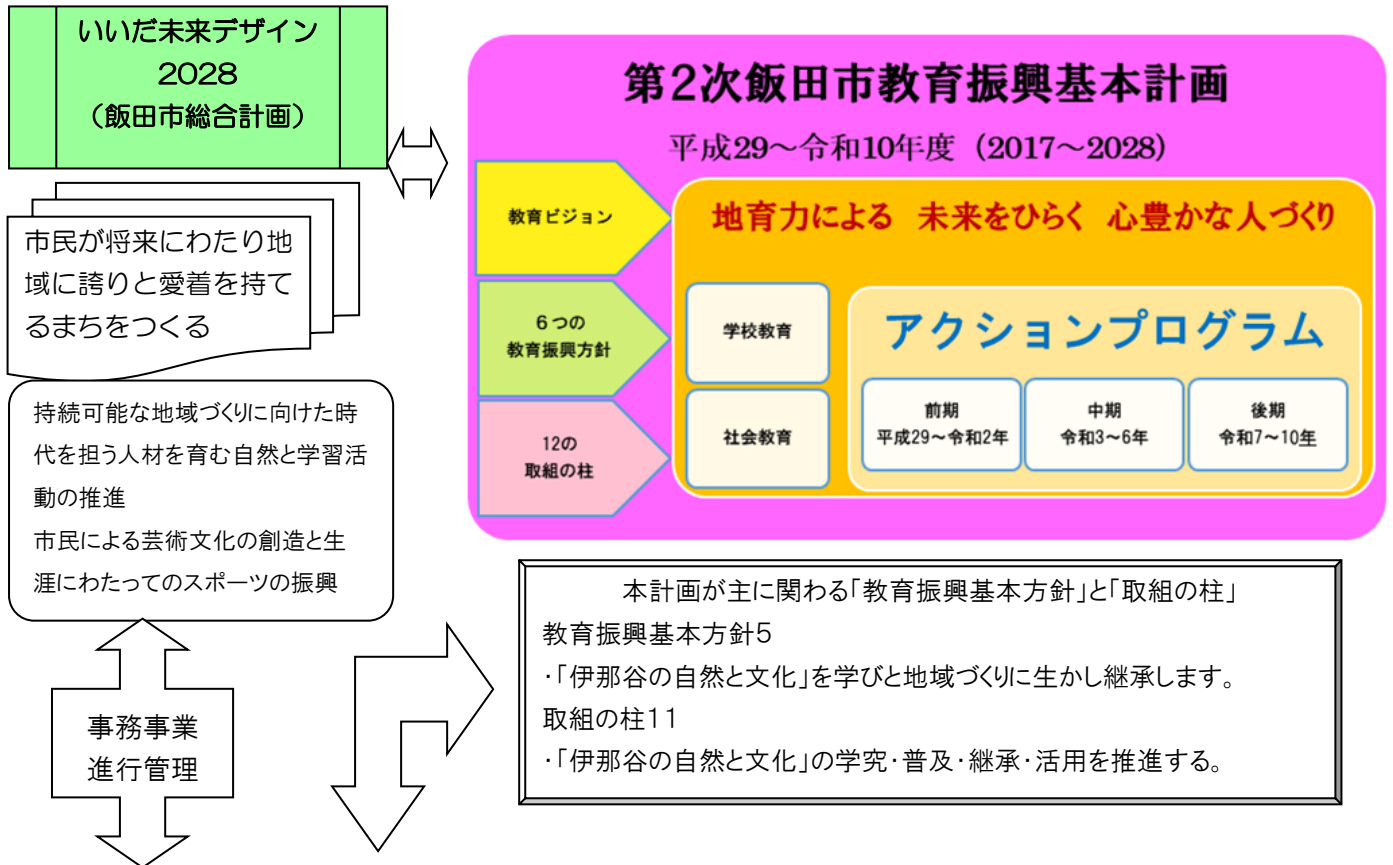
本計画の期間は、上位計画の期間と合わせて、平成29(2017)年度から令和10(2028)年度までの12年間とし、必要に応じて見直しを行います。また、進行管理は、上位計画と活動指標を共有、自己評価および助言をいただく外部評価会議を定期的開催、行政評価により定期的に指導を受け当館業務に反映をします。

4. 飯田市考古博物館について

飯田市考古博物館は、平成26(2014)年度に策定した「飯田市公共施設マネジメント基本方針」において、活用について優先的に検討する施設として位置づけられ、前期計画期間中に検討を進めてきました。

当該施設については、令和4(2022)年度に策定した「考古博物館活用基本方針」に基づき、文化財保護活用課により「展示(ガイダンス)」、「調査研究」、「市民活動支援」の3つの機能を統合させた文化財活用の拠点施設として位置付け活用していきます。

＜上位計画と飯田市美術博物館 2028 ビジョン・基本プランとの関係など＞



飯田市美術博物館 2028 ビジョン・基本プラン										
計画期間:平成 29 年度～令和 10 年度(2017～2028)										
計画の構成	2028 ビジョン					2028 基本プラン				
対象分野 活動分野	自然	人文	美術	プラネタ リウム	(考古 博物館)	自然	人文	美術	プラネタ リウム	(考古 博物館)
調査研究	めざす姿(今後のあり方) めざす姿の実現のための重点目標 学芸活動および分野別の取組方針					12 年間のアクションプログラム 3 期に分けたロードマップ 前期:平成 29～令和 2 年度(2017～2020) 中期:令和 3～6 年度(2021～2024) 後期:令和 7～10 年度(2025～2028)				
資料収集保存										
展示公開										
教育普及										
活動体制										
管理運営										
他との連携										

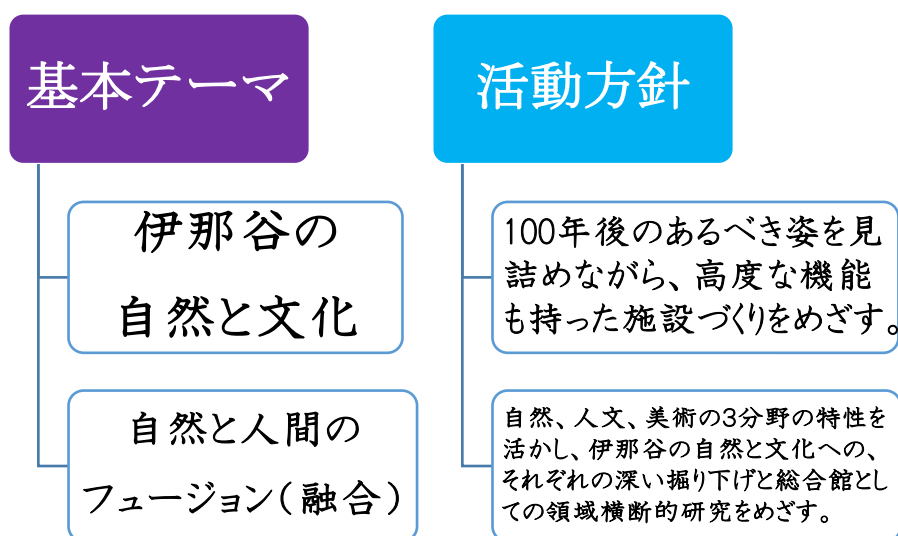
第2章 飯田市美術博物館の歩み

1. 飯田市美術博物館の基本テーマと活動方針

当館は、「伊那谷の自然と文化」から「自然と人間の融合」を探求することを基本テーマとして掲げ、「美術、自然科学及び人文科学に関する資料(以下「博物館資料」という)を収集し、保管し、展示して、市民の利用に供し、その教養、調査研究などに資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究を行う(飯田市美術博物館条例第2条)」ために、自然(プラネタリウムを含む)・人文・美術の3分野を有する総合博物館として、平成元(1989)年に開館しました。

以来、「100年後のあるべき姿を見詰めながら、高度な機能も持った施設づくりをめざす」、「自然、人文、美術の3分野の特性を活かし、伊那谷の自然と文化への、それぞれの深い掘り下げと総合館としての横のつながりをめざす」という活動方針のもとで、市民団体などと協働しながら、伊那谷の自然と文化の特徴や環境と人の営みとの関わりを探りながら、当地域の人々の営みの背景、要素、特徴、精神性といったものを明らかにして、人々の生活文化が豊かになるための学芸活動を行ってきています。

こうした博物館の基本を大切にした取り組みの継続により、飯田市民をはじめ、本館運営に賛同された他地域の多くの皆さんに、学びを提供する社会教育機関として広く認知されています。



2. 飯田市美術博物館の概況と主な沿革

当館には、自然と人文の常設展示室、菱田春草記念室、展示室A・Bの企画展示室、市民ギャラリー、講堂、科学工作室、学習室、プラネタリウムなどの施設を有した本館と、その附属施設である「日夏耿之介記念館」および「柳田國男館」(国登録有形文化財)があります。

開館当初は収蔵作品が少なく、展示室の閉室期間が少なくありませんでした。そこで館を挙げて特別展、企画展、特別陳列などの開催に努め、年間通じて開室できるようになってきました。各分野の主な展示の開催状況は別表(■参照)のとおりですが、市民主体の運動との協働により、菱田春草の「菊慈童」の購入(平成14年)や田中芳男像の再建(平成20年)にも取り組みました。また調査研究活動による人文分野・自然分野の資料の蓄積、井村コレクション、岩崎新太郎コレクション、綿半野原コレクションなどの美術コレクションや藤本四八、仲村進、正宗得三郎などの地域ゆかりの美術作品などの多くの寄贈があり、収蔵品は質・量ともに充実しています。

この間、平成5(1993)年7月、上郷町との合併によって「上郷考古博物館(現飯田市考古博物館)」が分館となり、「秀水美人画美術館」が附属施設となりました。さらに、平成16(2004)年4月には「追手町小学校化石標本室」

を開設し、翌年10月、上村と南信濃村との合併により、「上村山村文化資源保存伝習施設（以下、まつり伝承館天伯）」と「山村ふるさと保存館ねぎや（以下、ねぎや）」および「南信濃民芸等関係施設（以下、遠山郷土館）」の3施設を包含しました。まつり伝承館天伯とねぎやは平成20（2008）年より現在まで指定管理により運営を行い、遠山郷土館は平成22（2010）年より令和2（2020）年まで指定管理による運営を行い、以降は直営となりました。

設備の面では、平成5（1993）年6月に「電子顕微鏡装置」を導入し、平成19（2007）年1月にESCO 事業による空調設備の更新を行い、平成23（2011）年3月にプラネタリウムの投影機を「デジタル投影機」にリニューアルしました。令和5（2023）年に特定天井耐震補強改修工事、令和4-6年には照明 LED 化を行いました。なお、開館から30年を経て、施設などの修繕、刷新の必要性が高まっています。

3. 飯田市美術博物館を取り巻く状況の変化

飯田市では当館の開館以後、学習文化施設が整備、設置されてきています。人形劇のまちづくりが進められるなかで、平成10（1998）年に「竹田扇之助記念国際糸操り人形館」が、平成19（2007）年に「飯田市川本喜八郎人形美術館」が開館しました。また、平成11（1999）年には、江戸時代の旗本伊豆木小笠原氏に關係する歴史資料を展示紹介する「小笠原資料館」が、平成14（2002）年には、天竜川の自然や環境、防災について学習する「天竜川総合学習館かわらんべ」が整備されました。そして、平成15年（2003）には、史料を中心に地域の歴史、文化などを科学的、学術的に調査研究する「飯田市歴史研究所」が設置されました。これらの施設は、博物館として登録されていませんが、博物館類似施設として、文化振興事業を行っています。

さらに、「恒川官衙遺跡³」や「飯田古墳群⁴」の国史跡に指定となり、飯田市教育委員会生涯学習・スポーツ課が保存管理計画に基づいた整備に着手し、当館の活動と関わりのある取組が行われるようになっており、関係機関などとの役割分担と連携を図っていくことが必要になっています。このような要請から、図書館・歴史研究所などの社会教育機関を集積し、学術的拠点づくりを目指す構想の具現化も求められるようになってきています。

一方、当館の活動においても、南アルプスジオパーク・エコパーク⁵への関与、伝統民俗芸能の保存継承活動への支援、菱田春草生誕地公園整備への協力、竜丘児童自由画保存顕彰会との協働など、まちづくりに関連する活動が増えてきています。このように、当館を取り巻く状況は大きく変化してきており、当館には、地域内外から多くの人をひきつける魅力を高め、また、関係する施設や機関、市民団体などと連携して、今まで以上に地域の魅力や価値を探究、発信し、学びを通じたまちづくりに寄与していくことが求められています。

令和2年当初には「新型コロナウイルス感染症」が世界中に蔓延し、当館でも国県市などのガイドラインに沿って同年4月中旬から約2か月間の休館を余儀なくされました。域外への移動が制限された状況で、地域に美術館・博物館が存在することの価値が見直された面もありました。再開後は、コロナ禍以前の状況に復せるように館運営を行っていますが、今後の運営においては、コロナ禍の経験を教訓にして、集客型のイベントから満足度に重点を置いたイベントへの移行、開館できない中での情報発信や来館したくてもできない方への対応など、社会教育施設として多様な情報発信と施設の利活用を常に意識して事業を展開していく必要があります。

令和4年（2022）に博物館法が改正され、登録審査基準の見直しが行われ、博物館の活動や経営の改善・向上への仕組みが強化されました。具体的には、定期的な運営状況の報告の義務化、学芸員などの人材の養成・研修などです。また、デジタルアーカイブの作成と公開も博物館の新たな事業として加えられ、これからの博物館の役割として、教育や文化の域を超えて、まちづくり、観光、福祉、国際交流といったさまざまな分野との連携による地域社会への貢献が期待されるとされています。

³ 飯田市座光寺にある恒川遺跡群から発見された「伊那郡衙」の遺構は、奈良・平安時代に伊那郡を治めていた役所跡とされ、日本の歴史を知る上で重要な価値を持っているとして、平成26年3月18日、国指定史跡とされた。

⁴ かつて520基以上の古墳があった飯田市内に現在残る18基の前方後円墳と4基の帆立貝形古墳は、その形式の多様さや位置関係がヤマト王権との関係を密接に示すとともに、地方の視点から古代国家の成立を知る上でも貴重であるとして、平成28年10月3日に国指定史跡となった。

⁵ ユネスコが進めている自然環境の保全と持続可能な地域発展の両立をめざす取組。エコパークは生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的とし、ジオパークは大地と生態系や人間との関係を学ぶことが目的。3千m峰が連なる急峻な山岳環境の中、固有種が多く生息・生育している南アルプスは、平成24年ジオパークに、平成26年エコパークに登録された。本書では、登録順に「南アルプスジオパーク・エコパーク」と記す。

4. 飯田市美術博物館の取組の成果と評価

開館以来、「伊那谷の自然と文化」を対象に、「自然と人間の融合」を明らかにするために、様々な取組を行ってきました。その取組は、私たちの暮らしを取り巻いている自然はどのようなものなのか、私たちはその中でどのような暮らしをし、どんなことを大切にしているのか、そして、何を創りだしてきているのか、といったことを探り、明らかにすることでもあります。



私たちの暮らしている伊那谷は、日本列島のほぼ中間に位置しています。近くには東西に走る中央構造線と本州中部を南北に分断している糸魚川静岡構造線が交わり、大規模な地殻変動によって隆起した南アルプスと中央アルプスの2つの3千m級の山脈に挟まれている大きな谷と、浸食作用により刻まれた起伏に富んだ複雑な地形が、最大の特徴となっています。そして、生態系の南限と北限との重なりがもたらす自然の多様性と豊かさを持っており、今でも新種の動植物が発見されています。こうした特徴を持つ自然環境は、南アルプスコジオパーク・エコパークが象徴するように、地球上でも珍しく、注目される存在となっています。

一方、人々の生活文化の面からこうした自然環境を見れば、豊かで多様な自然の恵みがある一方、多くの人口を養うだけの平坦な場所が少ないという条件となります。それでも伊那谷には、今から3万年以上前から人が住んでいたことが、飯田市山本にある2か所の旧石器時代の遺跡³の発掘調査によってわかっています。そして、当地域にある遺跡の分布や出土物、今に伝わっている民俗や習俗などから、伊那谷の人々は、少ない適地に分立し、厳しくも豊かな自然への畏敬の念を持ち、協力しあって暮らしを営んできたことが窺えます。それが、「山・里・街の多様な暮らし」を形成し、「自主自立の気概」を育み、「結いの精神」の醸成につながっていると言えます。

そして、当地域で出土した物や今日に至るまで保存伝承されている多様な伝統芸能や民俗の調査から、それらの文物は中央構造線と糸魚川静岡構造線に沿ったルートでもたらされてきたことが推定されます。例えば、「縄文土器の文様」が山梨県で出土した物と類似していることや、「霜月祭り」は鶴岡八幡宮（鎌倉）とつながり、「新野の雪まつり」は春日大社（奈良）と関係し、「伝統人形芝居」は阿波や上方から伝えられたことなどから、伊那谷は、東西南北の文物が行き交う文化の回廊であると言えます。伊那谷の文化のこうした特徴は、日本における「自然と人間との融合」のあり方を示し、世界に日本を伝える大切な資産ともなりうるものです。

また、例えば、「飯田古墳群」はヤマト王権の勢力拡大を探る上で、「恒川官衙遺跡」は律令制国家建設の進め方を明らかにする上で、それぞれ注目されているように、日本の中央部に位置し、東西南北の街道が交差する伊那谷は、国内の政治状況や社会的な情勢の影響が複雑に絡み合う場所でもありました。そのため、当地域内で分立していた小勢力は、その時々政治社会の情勢に敏感に反応し、遠交近攻、離合集散を繰り返し絡み合いながら生きぬいてきました。



＜黒田人形芝居＞

³ 飯田市山本にある「石子原遺跡」（昭和47年発掘）と「竹佐中原遺跡」（平成13年発掘）で、双方から旧石器時代の石器が発見されている。日本列島の人類史の始まりは3万8千年前と言われているが、両遺跡の石器を調査したところ、3万年より古く5万年より新しいと推定された。両遺跡は、日本列島の人類史の始まりを探る上でたいへん重要なものであり、飯田はもちろん日本における貴重な遺物である。

東西南北の人・物・情報が行き交う場所であったからこそ、私たちの先人は交易と交流を通じて情報に対する感度を磨き、生きる知恵を得ること、すなわち、「学びと文化」を大切にしてきたと言えるでしょう。そのような精神風土が、田中芳男や菱田春草をはじめ近代日本の形成に活躍した人々を多く輩出した土壌となっているとも言えるでしょう。知れば知るほど、探れば探るほど、「伊那谷の自然と文化」は、多様性と固有性を持っており、地球的に見れば個性的であると言ってもよいでしょう。当館は開館以来、「伊那谷の自然と文化」が持つ多様性と固有性を探るなかから、「飯田らしさ」のエッセンスとも言える「結いの精神」・「高い文化性」・「学びの風土」のあり方を明らかにする取組を進めてきています。そして、これからの大交流時代を迎えるに当たっては、グローバルな視野を持って、「伊那谷の自然と文化」と「飯田らしさ」を探求し訴求していく必要があります。

自然分野では、地球的に見ても特徴のある伊那谷の自然のダイナミズムと多様性を探求することによって、また、プラネタリウム分野と協力しながら、地球の成り立ちと動きを考えていきたいと思ひます。人文分野では、文化の回廊としての伊那谷の歴史や生活文化の特徴や変遷を探求することによって、持続可能な地域のあり方を考えていきたいと思ひます。美術分野では、飯田が生んだ日本画の開拓者である菱田春草を中心に伊那谷の文化性の高さを訴求していきたいと思ひます。



＜菱田春草「菊慈童」（当館蔵）＞

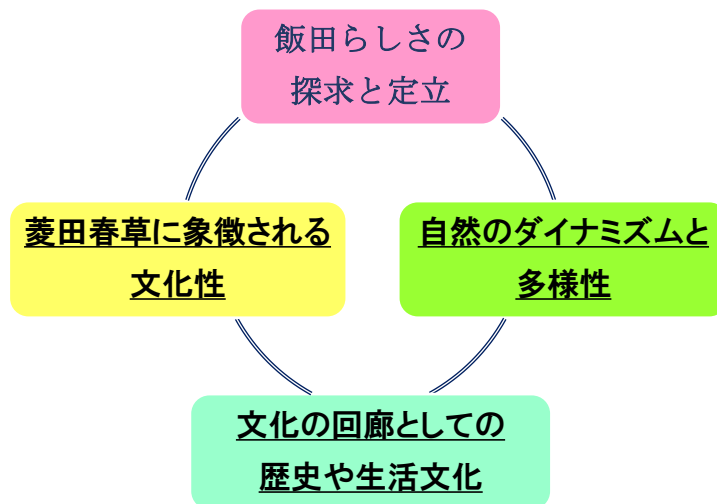
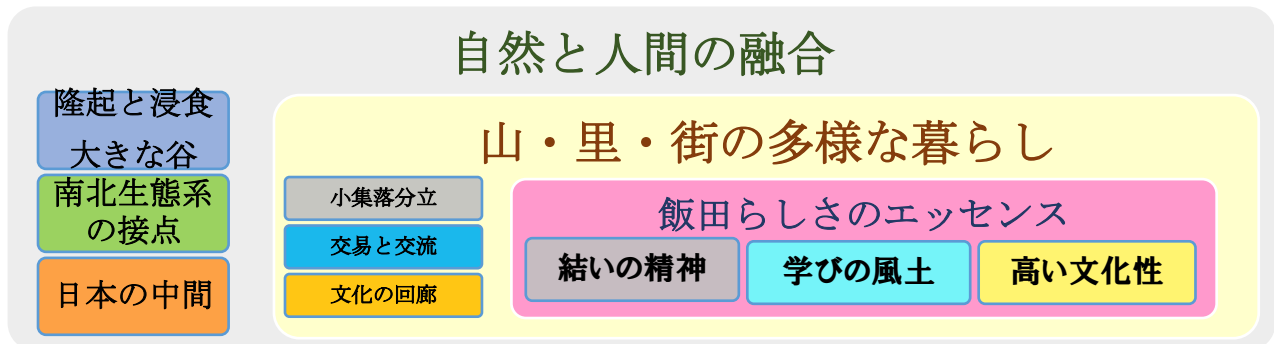
このような思いの下に、前期計画4年間では「展示の魅力アップ」を目標に掲げ、平成29(2017)年には春草記念室常設化を行い、春草作品の魅力向上と情報発信力の強化を図り、令和元(2019)年には開館30周年を迎え、これまでの調査研究の蓄積を活用して自然・文化展示室をリニューアルしました。併せて、トピック展示コーナーを設け、解説に ICT 技術を導入するなど多様な学びに対応するなど「伊那谷の自然と文化」の魅力をもっと発信できる施設として新たな一歩を踏み出しました。

中期計画4年間では、「来館者に親しまれ、学びの多様化に対応する教育普及活動と情報提供環境の構築」を目標に掲げました。中期計画期間に入る直前の令和2(2020)年1月に新型コロナウイルス感染症拡大が始まり、令和5(2023)年5月に5類感染症に移行するまで、従来型の対面形式の講演会・講座の開催は「密を避ける」などの対策が必要となったため、申し込み制による人数制限や配信による開催といった新たな対応を行いました。この経験は、来館できない人に当館の成果を利用していただくための方法として有効であり、5類移行以降も著作権などの制限がない講演会・講座については、対面と配信によるハイブリッド開催などを行うようになりました。

また、コロナ禍によって地域外への移動が制限された時期に開催した菱田春草没後110年特別展では、感染防止対策を行いながら1万人以上の来館者を迎えることができ、地域に博物館が存在することで、遠出をしなくても優れた美術品出合い、地域の自然・自然について学ぶことの環境を整えておけることの意義を再認識しました。また、市民の関心が深い「城下町飯田と飯田藩」「りんご並木と田中芳男」「南アルプスジオパーク ジオサイトを巡る」など地域に関わる展覧会を開催しました。情報提供については、館蔵資料のデータベース化を進め、古文書目録については Web 上で公開しました。これらによって、市民の学びが深まり、「飯田城下町サポーター」による市民ボランティアの取組も立ち上がりました。

多様性の時代を迎え、自分らしい価値観を持って情報を得る人々が増加し、学びのスタイルもますます多様化しています。一方、人口減少にともない地域では文化・芸術に携わる人が減少しており、次世代への継承が課題になっています。デジタル化がさらに進むと思われる後期計画期間において、研究活動の成果を新しい技術を活用しながらわかりやすく発信することで、多くの人が美術博物館を活用し、多彩な学びが行われ、郷土愛を持った人々がつながって地域の課題解決にむけた協創の場となるような美術博物館をめざします。

<伊那谷の自然と人間の融合が醸成する「飯田らしさ」>



第3章 飯田市美術博物館 2028 ビジョン

1. めざす姿

開館以来、「伊那谷の自然と文化」の特徴や環境と人の営みとの関わりを探りながら、当地域の人々の営みの背景、要素、特徴、精神性といったものを明らかにして、人々の生活文化が豊かになるための学芸活動を行ってきています。その中から、「伊那谷の自然と文化」は、多様性と固有性を持ち、地球的に見ても個性的であること、「飯田らしさ」は、結いの精神や高い文化性と学びの風土から醸し出されていることが、浮かび上がってきました。こうした特徴をもつ「伊那谷の自然と文化」は、飯田の価値と魅力を発信する大きな資源であるとともに、地域を知り学ぶ大切な教材でもあります。

世界や国内との時間的距離が飛躍的に短縮され、交流が活発化することが予想される大交流時代において、心豊かで希望に満ちたまちづくりを進めるためには、グローバルな視野を持ちながら、地域の個性を大切に磨き、地域の価値と魅力を発信していくことが大切になります。

「いいだ未来デザイン 2028」は、「リニアがもたらす大交流時代に『くらし豊かなまち』をデザインする～合言葉はムトス 誰もが主演 飯田未来舞台～」をキャッチフレーズにして、実現したい8つのまちの姿を掲げており、その中には、「学び合いにより生きる力と文化を育むまち」という姿があります。←上位計画により変更する

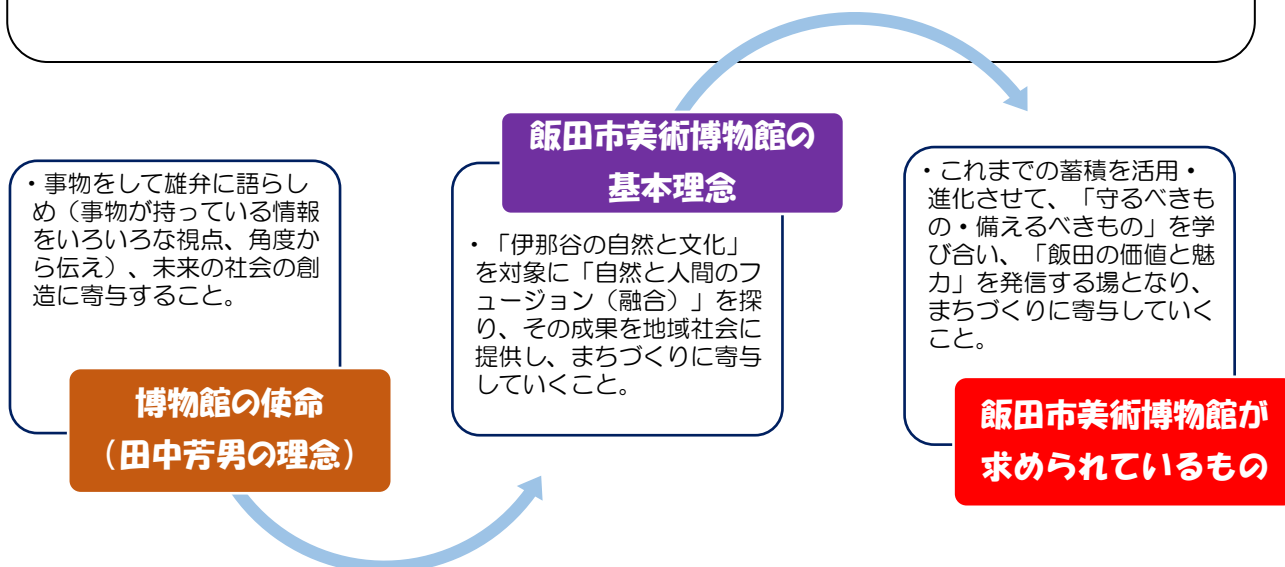
また、第2次飯田市教育振興基本計画は、「地育力による 未来をひらく 心豊かな人づくり」を教育ビジョンとして掲げ、変化の激しいこれからの時代に向かって、グローバル（地球規模的）な視野と感性、ふるさと飯田への誇りと愛着をもって、自らの力で未来を切り拓いていく人づくりを目指しています。そのビジョンを実現するための6つの取組方針の中に、「伊那谷の自然と文化」を学びと地域づくりに生かし継承することを掲げています。

こうした上位計画が目指しているまちや人づくりを進めるとき、当館の使命は、開館以来 30 年にわたって蓄積してきたものを活用、深化、発展させ、地域の環境や民俗文化を理解し、「守るべきもの・備えるべきもの」を考え、「飯田の価値と魅力」の存在価値の高さを内外に発信、学びあうことによって、まちづくりに寄与していくことだと考えます。

こうしたことを踏まえて、当館のめざす姿を、「飯田の価値と魅力」を発信し学び合い、持続的な「未来を創造できる」ミュージアムとし、これからの事業活動に取り組みます。

飯田市美術博物館 2028 ビジョン＜めざす姿＞

「飯田の価値と魅力」を発信し学び合い、持続的な「未来を創造できる」ミュージアム



2. 重点目標

めざす姿の実現に向けて、3つの重点目標を定めます。

(1)「伊那谷の自然と文化」の総合的なガイダンス機能を高め、飯田の魅力を広く紹介します。

当館には、ユネスコのジオパーク・エコパークに登録された南アルプスに関する調査研究、宝庫と言われる民俗芸能や伝統文化などに関する有数の知見、近代日本画を切り拓いた菱田春草をはじめとする豊富な美術コレクション、全天型映像を生かすプラネタリウムなど、「伊那谷の自然と文化」に関する多くの蓄積があります。

今後は、これまでに蓄積した財産を総合的に活用して、地球的に見ても個性的と評価されている「伊那谷の自然と文化」を「飯田の魅力」として、広く紹介していく取組を進めるとともに、地域内の博物館類似施設や現地などとの連携の強化、ネットワークの整備などに取り組み、当館設置時の基本構想が掲げた「伊那谷まるごと博物館⁷」へと誘う総合的なガイダンス機能を高めていきます。

(2)地域の学術研究・教育機関の一翼を担うべく、「交易と交流」を視点に「飯田の価値と魅力」を探ります。

東西文化の接点と言われる当地域は、多様な文化背景と出会い、多様な生活文化を育み伝えてきています。その背景として、険しく複雑な地形の中に張り巡らされている道を通して、多彩な人、文物、情報がもたらされ、地域内で行き交う「交易と交流」があると考えられます。当地域ならではの「交易と交流」の有り様やそれによってもたらされた生活文化は、高速交通網がもたらす大交流時代のまちづくりの参考となります。

博物館には、学術研究機関としての役割があります。そうした機関などが協力連携しながらまちづくりに寄与していく主要な一翼を担うべく、「交易と交流」を視点に「飯田の価値と魅力」を探る取組を進めていきます。

(3)多様な学びに学術的に応え、文化の創造と地育力⁹の向上に寄与します。

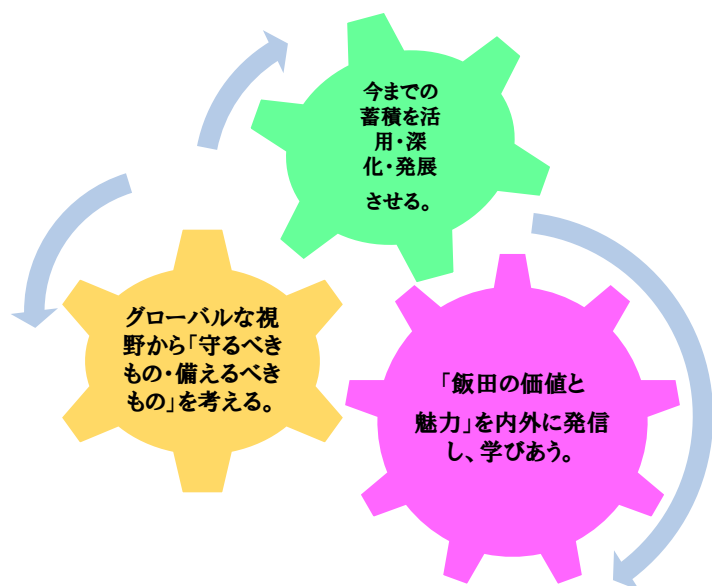
当地域には古くより「学びの風土」があります。博物館は、教育機関としての役割があります。当館は開館以来、調査研究、教育普及活動において、市民研究団体との協働や他の教育研究機関との連携を大切にしてきました。しかし、近年、当館と協働して活動してきた研究者が高齢化などにより減りつつあるとともに、市民の学びの欲求や学び方が多様化してきています。また、市民が、「伊那谷の自然と文化」や郷土の先人たちの偉業についても、知り、語り、誇れるような学びを提供していくことが大切になっています。

今後は、こうした学びの担い手や欲求の変化に対応するとともに、市民にとって主体的で現実感に満ちた学びを進められるように、これまで以上に学術的専門性をいかし、また、市民や教育機関などとの連携を強化して、地域文化の創造と人材の育成を図り、地育力の向上に寄与する取組を進めていきます。

⁷ 「伊那谷まるごと博物館」とは、伊那谷の各地にある自然や文化に関する事物や事象、それらの紹介や保存などの活動を行っている様々な団体や施設をいかして、伊那谷全域を学びの場とし、そのガイダンス機能を飯田市美術博物館が担っていくという構想。

⁹ 「地育力」は、飯田市の造語で、ふるさとに自信と誇りを持つ人を育む力を意味する。飯田の資源を生かして、飯田の価値と独自性に自信と誇りを持つ人を育む力であり、地域の多様な資源や人材に触れながら体験的に学ぶ過程において発揮・活用される。

＜めざす姿と3つの重点目標＞



「伊那谷の自然と文化」の総合的なガイド機能を高め、飯田の魅力を広く紹介します。



地域の学術研究・教育機関の一翼を担うべく、「交易と交流」を視点に「飯田の価値と魅力」を探ります。



多様な学びに学術的に応え、文化の創造と地育力の向上に寄与します。



3. 学芸活動の活動方針

近年、博物館・美術館は、本来の学芸活動の高度化専門化を期待されるとともに、その機能を地域振興に生かすことも求められるようになっていきます。また、人々の日常生活のなかに生涯学習が広まり浸透するに連れて、「見てふれて 学んで考え 感動を得られるミュージアム」となるような学芸活動が大切になってきています。

当館は開館時から、地域重視を基本に市民との協働を図りながら、学芸活動を展開してきました。また、それぞれの学芸員が専門とする分野より広いものを扱うことが求められるため、様々な学術研究の動向や成果に目を配りながら、多くの研究者や教育研究機関などとの協力も行ってきました。

今後は、学芸ごとに取組方針を掲げ、蓄積した学術的な成果や専門的な知見を活用して、地域資源の資産化と未来への継承を進め、「守るべきもの・備えるべきもの」を学べ、「飯田の価値や魅力」を継続的に確認し、まちづくりに生かせるような学芸活動を展開していきます。

(1) 調査研究

調査研究は、学芸活動の基本をなすもので、その成果は研究紀要などの形で公表するとともに、展示公開や教育普及において利活用します。また、その内容は学術的な評価に耐えうる水準を求められるものです。

調査研究は、期間を限って集中的に取り組む場合や継続的に行う場合がありますが、いずれの場合でも目的と対象を明確にすることが重要です。

そして、当館においては、地域の学術研究・教育機関を担う一翼として、他の教育研究機関や「学輪IIDA¹⁰」などとの連携を図りていく必要があります。

こうした調査研究活動の基本を踏まえ、今後の活動方針を以下のように定めます。

【調査研究 活動方針】
○「飯田の価値と魅力」を明らかにし、その成果をまちづくりに生かせる調査研究を進めます。
○他の博物館、大学、地域の学校、地域団体と連携し、共同研究を進めます。
○市民などと協働する裾野を広げ、調査研究活動の担い手の育成に努めます。

(2) 資料の収集保存

博物館資料の収集は、調査研究と一体をなすもので、一般的には、調査研究テーマに応じて博物館資料を収集する場合と、包括的に収集した博物館資料を詳細に調査し研究する場合とがあります。また、博物館資料には、標本、文献、文書、作品など様々な種類と形態、材質があり、当館所蔵、当館寄託、借用といった所有形態の違いもあります。

従って、博物館資料の収集と保管は、それぞれに適した方法で行う必要があるとともに、他の学芸活動において有効に利活用されるように、きちんとした整理・保管が大切です。

こうしたことを踏まえて、今後の活動方針を以下のように定めます。

【資料の収集保存 活動方針】
○「伊那谷の自然と文化」に関する特色あるコレクションを形成します。
○「伊那谷の自然と文化」に関する学術研究の資料センターとしての機能を高め、デジタルアーカイブを充実させ資料の情報公開を行います。
○博物館資料の増加や貴重な文化財などの保存に対処し、収蔵場所について、他の学術研究・教育機関などと連携して確保していきます。

¹⁰ 平成 23 年 1 月、南信州・飯田フィールドスタディなどを通じて飯田市と関係を深めてきた大学・研究者などが、市と各大学との1対1の関係から、飯田を起点として相互につながる有機的ネットワークを形成するために設立。「21 世紀型の新しいアカデミーの機能や場をつくる」をコンセプトとし、研究者同士が相互に知り合い親交を深めつつ、モデル的な研究や取組を地域（産業界・教育界・住民・行政など）とともに進めている。

（3）展示公開

展示公開は、博物館・美術館の機能の中核をなすもので、人々の生活文化の向上や学びの発展に寄与するために、調査研究の成果を、物や情報を活用して広く分りやすく公開する活動です。

多くの博物館・美術館は、常設展示と、企画展・特別展・特別陳列（以下「企画展示など」という）を行っています。企画展示などに比重が置かれ、常設展示が疎かになるという問題が指摘されています。また、近年、常設展示を行わない施設も現れるなど、展示公開のあり方も多様化しつつあります。

展示公開の充実と魅力の向上には、不断に取り組む必要があります。特に常設展示は、その博物館・美術館の顔であり、常に改善し工夫していくことが求められます。また、時宜を得た企画、対象を明確にした内容、目玉となる展示物などを精選し、企画展示などの魅力を高める工夫も必要です。

そして、大交流時代においては何よりも、飯田の魅力を紹介し発信していく役割も担っていくことを意識して、展示公開活動を行っていくことが重要になります。こうしたことを踏まえて、今後の活動方針を以下のように定めます。

【展示公開 活動方針】
○「伊那谷の自然と文化」の特徴を紹介し、「飯田の価値と魅力」を発信する常設展示の学習機能を高めます。 ○調査研究成果を活用して、歴史的ならびに新たな視点に基づく展覧会を開催します。 ○人々の知性、感性、感動を刺激し、創造をもたらす展覧会、まちづくりや市民の学びに応える展示を計画的に開催します。 ○多様な展示方法の導入や展示解説の充実を図り、わかりやすく楽しめる展示をめざします。

（4）教育普及

教育普及は、博物館・美術館が教育機関としての役割を果たすための学芸活動です。地域のかけがえのない自然や暮らしが育んできた文化を楽しみ育んでいく学びは、人々の生活文化を豊かにし、まちづくりにつながっていきます。

当館は、学術的専門性を持つ教育機関として、他の教育研究機関と連携、協力し、市民の学びを支援していく役割が期待されています。こうしたことを踏まえて、今後の活動方針を以下のように定めます。

【教育普及 活動方針】
○市民の学びの多様化に対応した取組を工夫するとともに、学び合いの場としての機能を高めていきます。 ○魅力的で質の高い学習プログラムを開発して、子ども達への学びを提供するとともに、地域の文化活動への援助、助言を行います。 ○学芸員の持つ専門性をいかして、他の教育機関などと連携した質の高い教育普及活動を進めます。

（5）学芸活動の体制

博物館や美術館の職員には、館長と、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどる有資格の学芸員および学芸員の職務を助ける学芸員補の2職種（博物館法第4条・第5条）があります。当館では、学芸員と学芸員補に当たる専門研究員が分野ごとのチームとなって学芸活動を行っています。

学芸活動を発展向上させていくためには、こうした体制を確保し整えていくことと、これまで以上に自然・人文・美術の3分野が領域横断的に連携していくこと、一層の職員の能力向上や研さんが欠かせません。こうしたことを踏まえて、今後の活動方針を以下のように定めます。

【学芸活動の体制 活動方針】

- 学芸活動の継続と発展を支える体制を確保し、市民の学びやまちづくりを支援できる取組を強化します。
- 専門職種の役割分担と連携を柔軟に行い、当館の基本テーマに即した活動に取り組みます。
- 学芸員等及び事務職員の研修を行い、博物館活動とともに館のマネジメントに携わる人材の養成を行います。

(6) 管理運営

管理運営は、来館者へのサービスや施設設備の管理業務など、施設全体の環境を整え向上させていく重要な任務を担っています。施設を劇場として見てみると、学芸活動が公演に当たり、管理運営業務はお客様に対応する表方と公演を支える裏方に当たると言えます。つまり、管理運営業務は、施設の活動の基盤であり、その評価に直結する大切なものです。

管理運営においては、市民に親しまれ必要とされる施設をめざしていくことが基本です。また、大交流時代を迎えるに当たり、国内外へのアピールを強化し、より多くの人々が来館できるような運営も求められています。こうしたことを踏まえて、今後の活動方針を以下のように定めます。

【管理運営 活動方針】

- 常に市民に親しまれ、より身近に活用される施設なるように、サービスの充実や向上を図ります。
- 飯田下伊那地域への人の流れを生かせるPRや情報発信の強化を図ります。
- 博物館機能を保つために計画的な施設設備の整備を進めていきます。

(7) 多様な主体との協働や研究教育機関などとの連携

博物館・美術館の基本的な使命は、「学術文化の発展に寄与し、もって人々の生活文化を豊かにして、未来の社会の創造に寄与する」ことですが、この使命を達成していくためには、多くの研究者や研究機関などとの協力が不可欠です。こうしたことを踏まえて、今後の活動方針を以下のように定めます。

【多様な主体との協働や学術研究・教育機関との連携 活動方針】

- 「伊那谷の自然と文化」の調査研究や保存活動を行う研究者や研究団体と協働し、事業を進めるための助言や援助を行います。
- 飯田市歴史研究所や飯田市直立中央図書館などとの役割分担と連携を図り、地域の学術研究・教育機関の一翼を担うとともに、学校教育機関や公民館などとの連携のあり方を整えていきます。また、周辺地域にある類似施設などとの連携や共同事業を進めます。

<ミュージアムの6W>

見てふれて

何だろう What?・誰だろう Who?

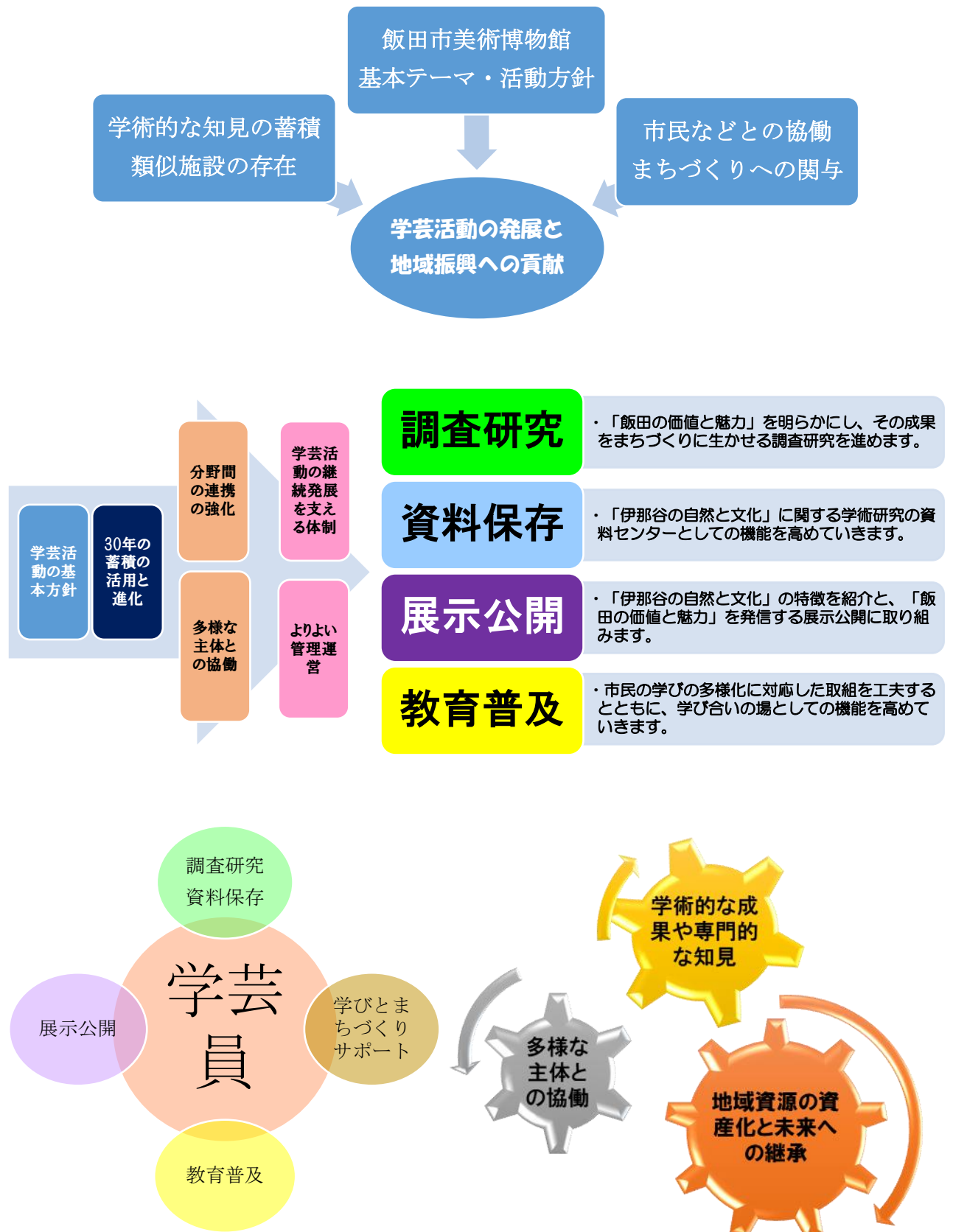
学んで考え

いつ When?・どこで Where?・なぜ why?

感動を

わくわく楽しい wakuwaku!

＜これからの学芸活動のあり方のイメージ＞



4. 各分野のテーマ・活動方針と重点的な取組

当館の自然・人文・美術・プラネタリウムの各分野では、それぞれの特質に応じて「伊那谷の自然と文化」を探求してきました。今後は、これまでの蓄積を生かして本計画を達成するテーマと活動方針を掲げ、将来展望を開く取組を重点的に進めていきます。

（1）自然分野

主に伊那谷自然友の会と連携して、「伊那谷の自然とその成りたち」を探る取組を行ってきています。すなわち、内陸の火山帯と海溝の間で生じた過去から現在に至るいろいろな現象の痕跡や証拠を明らかにし、また、2,700mの標高差がある自然の多様性とその変化を継続的に調査しています。

また、学芸員が中心となって収集した資料や、関コレクション（世界のチョウ）、井原コレクション（伊那谷のチョウと蛾）、飯島コレクション（長野県産陸貝）、長谷川コレクション（世界各地の化石と骨）などをいかした資料センターとしての機能も発揮しています。

こうした活動の積み重ねによって、御池山隕石クレーターの発見、南アルプスジオパーク・エコパークの認定などの成果をもたらすとともに、地球上でも特徴のある伊那谷の自然の「固有性と多様性」を明らかにしつつあり、長野県を代表する自然系博物館として研究者などから認められるようになってきています。

今後は、今まで以上に「伊那谷の自然の面白さ、豊かさ」をより身近なものとして実感できるようにするとともに、その魅力を広く伝えていく必要があります。



＜当館西側の岩石園＞

テーマ	伊那谷の自然とその成りたち－個性的で多様な自然－
活動方針	○オリジナルな調査研究をベースとしながら、地域の生活基盤である伊那谷の自然の成りたちを通じて、その固有性、多様性を伝えていきます。
重点取組	・「伊那谷の自然の成りたち」をテーマとして常設展示の学習機能を高めます。 ・伊那谷の自然の特徴と魅力を紹介する企画展示などを計画的に行います。 ・子ども達を対象に、伊那谷の自然を学ぶフィールド学習を行います。 ・暮らしに直接関係する災害や地球環境問題についての教育普及活動を進めます。 ・南アルプスジオパーク・エコパークの魅力を広める活動を支援していきます。

（2）人文分野

「伊那谷の文化とその特徴」をテーマとし、関係機関や市民研究団体、伝統芸能保存継承団体などと連携して、民俗や伝統的な文化芸能の調査記録、城下町の歴史と文化の発掘、郷土の先人に関する資料収集と顕彰などを対象にした調査研究を進め、先人が育んできた暮らしや文化のなかから、「飯田らしさ」を探る取組を行ってきています。特に、複雑な地形と東西の結節地域という地理的条件のもとで、保存伝承されている多様な民俗芸能に関する調査研究は、柳田國男が創設した民俗学を継承発展させている取組として、全国的にも独自の地歩を築いています。

かくして当地域の山・里・町の多様で豊かな生活文化の特質を、交易と交流によって形成された「文化の回廊としての伊那谷」と名付けました。また、田中芳男関連資料の充実などにより、郷土の先人の顕彰に関する学芸活動も拡充してきています。

こうした取組によってもたらされている知見や成果は、まちづくりや地域活動においても活用されるようになっていきます。例えば、当地域の民俗芸能は、日本文化を世界に伝える大切な資産であるという認識が広まりつつあります。

今後は、これまで蓄積してきた成果をもとに、「文化の回廊としての伊那谷」を形成しているものを探求し、市民の活用へとつながる発信をしていく必要があります。



＜田中芳男の胸像＞

テーマ	文化の回廊としての伊那谷ー多彩で豊かな文化を紡ぐー
活動方針	○調査研究の成果を生かし、交易と交流という視点から、「文化の回廊としての伊那谷」の歴史と文化の魅力を明らかにしていきます。
重点取組	・引き続き「文化の回廊としての伊那谷」をテーマとして、展示内容や活用方法を随時見直しながら展示室の学習機能を高めていきます。 ・伊那谷の歴史、民俗、文化、産業の特徴と魅力を紹介する企画展示などを開催します。 ・田中芳男をはじめとする郷土の先人を顕彰し、偉業から学ぶ取組を進めます。 ・関連する諸機関や施設、地域の研究者などと連携しながら、伊那谷の文化の特徴を幅広く調査研究し、成果を発信し、学べるセンターとしての機能の充実に努めます。 ・南信州民俗芸能継承推進協議会と連携して三遠南信地方の民俗芸能の資産化を進めるとともに、伝統芸能や文化財の保存継承活動への支援を行っていきます。

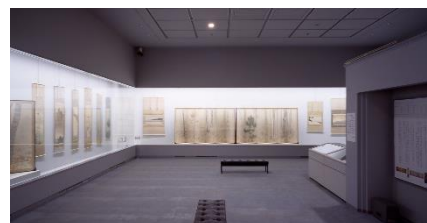
(3) 美術分野

当館設立の基本構想である菱田春草の顕彰を柱に、当地域の美術振興の中心的な施設になるべく活動を続けてきました。菱田春草の顕彰については、収蔵作品や関連資料の充実を進め、常設展や企画展で紹介しています。全国有数の菱田春草コレクションを所蔵するまでになるとともに、春草研究センターとしての機能整備も進みつつあります。さらに、『菊慈童』の購入や春草生誕地公園整備事業などにおける市民運動との協働も行っています。

一方、伊那谷の美術を調査研究し、郷土作家の作品を中心に地方都市の美術館としては有数のコレクションを所蔵し、それらの作品に対する学芸活動を展開しています。

また、市民の創作活動への支援としては、平成12(2000)年度から実行委員会方式による「現代の創造展」を開催し、市民の創作活動の発表の場である市民ギャラリーは9割を超える利用率を維持しています。さらに、平成14(2002)年度から「子ども美術学校」、令和4(2022)年度から「中学生造形教室」を設け、学校外の造形教育の場として多数の児童生徒が通っています。

現在は、日本を代表する春草美術館としてだけでなく、郷土の美術の資料センターとしての役割も期待されるようになっています。今後は、菱田春草生誕地の美術館としての発信をより強化するとともに、地域の芸術創造の担い手たちの創造と創意の喚起力が発揮できる場としての整備を進めていくことが求められています。



＜菱田春草記念室の展示＞

テーマ	伊那谷の芸術文化の循環—その心と創造の源泉—
活動方針	○菱田春草生誕地の美術館として、国内外に春草を発信していきます。 ○伊那谷の芸術文化の様相や特質を明らかにし、新たな創造と存在価値を発信する美術館をめざします。 ○持続的な芸術文化発展のための基盤づくりに取り組みます。
重点取組	・我が国唯一の菱田春草常設展示を充実させるとともに、菱田春草研究の成果を生かした企画展示などを計画的に行います。また菱田春草資料センターとしての機能を整備します。 ・伊那谷の芸術文化の特性を調査研究によって明らかにし、人々の知性、感性を刺激し、感動、創造をもたらす展覧会を開催します。 ・地域で芸術創造に携わる幅広い世代の人たちたちが、芸術に親しめる展覧会の開催や教育普及活動を行います。

(4) プラネタリウム分野

無限に広がる宇宙への興味と関心は、天文に関する様々な文化と宇宙に関する科学・技術の進歩により、著しい発展をもたらしています。当館では開館以来、主にこども達を対象にして、プラネタリウム番組の投影による天文宇宙教育を行ってきました。また、平成23(2011)年にデジタル式投影機を導入し、「伊那谷の自然と文化」を記録・紹介するオリジナル番組の制作と投影を行っています。

プラネタリウムは、幼少期から映像を通して博物館に親しむ入り口となっており、楽しみながら学習することができる施設です。一方で、プラネタリウムがいざなう天文宇宙の広大な世界を知ることは、視野の広がりをもたらし、生命をはぐくむ地球の環境の尊さを知ること、身近な自然を慈しむ眼差しを育むことになります。このようなプラネタリウムの特性を生かし、天文宇宙に関心を持つ人や天文宇宙教育の担い手の育成といった取組も期待されています。



＜当館屋上のドーム＞

テーマ	広大な宇宙と尊い地球の環境-身近な自然と宇宙への眼差し
活動方針	○全天周映像の特徴をいかし、天文教育を推進するとともに、映像により「伊那谷の自然と文化」の魅力を発信します。
重点取組	・魅力的な番組による一般投影、予約投影、特別投影や伊那谷の星空を体験する観望会などを実施、天文教育を行います。 ・天文宇宙に親しむ人々がプラネタリウムに集い、学習を深められる場を作っていきます。



文化の回廊で
育まれた
暮らしと文化

日本画の 革新者 「菱田春草」

第4章 飯田市美術博物館 2028 基本プラン

本章は、「2028 ビジョン」の達成に向けた取組(アクションプログラム)を示す「2028 基本プラン」です。学芸活動の事業ごと、また、自然・人文・美術・プラネタリウムの分野ごとに、開館以来の歩みを振り返りながら、現状と課題、活動方針と主な取組を示してあります。なお、第2章の「3. 学芸活動の取組方針」および「4. 各分野のテーマ・活動方針と重点的な取組」の記載と重複している部分があります。（各活動の重点取組は●で表示しています。）

1. 調査研究

(1) 現状と課題

当館の調査研究活動は、自然分野では伊那谷の成り立ちと自然環境を、人文分野では伊那谷の民俗や歴史文化を、美術分野では菱田春草を中心とする郷土作家の芸術性を、それぞれのテーマとして、学術的なアプローチを基本に、市民研究者や地域の研究団体などと協働して地道に続けてきています。そして、調査研究の成果は、『研究紀要』や『自然史論集』を毎年刊行しているほか、調査報告書などを数多く刊行して発表するとともに、常設展示や企画展示、トピック展示、講座・講演会にも生かしています。

一方、自然分野における南アルプスジオパーク認定・南アルプスユネスコエコパーク登録への関わり、人文分野における民俗芸能や地域の伝統文化の保存継承への関わり、美術分野における菱田春草生誕地公園活用や郷土出身作家顕彰への関わりなど、調査研究の成果を生かして、まちづくりや地域再発見などの取組への関与が増え、地域の皆さんとの協働による活動が活発になってきています。

今後は、そうした期待に応えるとともに、「飯田の価値と魅力」を高めていけるように、他の博物館、大学、地域の学校、地域団体と連携した共同研究を進めていく必要があります。特に人文分野においては、飯田市歴史研究所など市の関係機関が扱うものと重なることもあり、調整と連携を図りながら、より成果を高めていく必要があります。

また、世界的な取組として地球温暖化への対応が求められており、自然分野では他機関と連携した動植物の生態調査を継続して取り組んでいく必要があります。さらに、近年、地域で活動してきた研究者の高齢化などにより世代交代の時期を迎えていることから、次世代の市民研究者などの育成も図っていく必要があります。

(2) 活動方針と主な取組

共通	方針 (再掲)	○「飯田の価値と魅力」を明らかにし、その成果をまちづくりに生かせる調査研究を進めます。 ○他の博物館、大学、地域の学校、地域団体と連携し、共同研究を進めます。 ○市民などと協働する裾野を広げ、調査研究活動の担い手の育成に努めます。
	取組 (●は重点取組)	●「伊那谷の自然と文化」を調査研究し、その成果を発表するとともに、デジタル技術を活用しての発信を促進します。 ○分野間や他の学術研究・教育機関と地域課題に関わる研究テーマを調整し、相互連携を行います。 ○学習室のレファランス機能を強化し、専門図書の閲覧など市民研究の便宜を図ります。 ○地域の学術研究・教育機関の一翼を担い、他の社会教育研究機関や「学輪 IIDA」などとの連携を図ります。 ○他の博物館、大学、地域の学校、地域団体との連携し共同研究を促進します。
自然	方針	○伊那谷の地質や生物を対象に、飯田の風土を形成してきた自然環境の多様性や固有性を掘り下げる調査研究を推進・継続します。
	取組 (●は重点取組)	○天竜川流域の山岳、扇状地、河川などの地形地質および生物を対象として、伊那谷の自然の特徴を明らかにする調査研究を行っていきます。 ●南アルプスユネスコエコパーク・南アルプスジオパークの保全活用に向けた基礎研究を今後も継続するとともに、南アルプスの特性をより明確にするために、近隣の山岳(中央アルプス、

		ハケ岳、北アルプスなど)の調査を行い、比較のための資料を収集します。 ○地域の環境変化や地球温暖化による気候変動の影響を明らかにするための調査研究の実施や市民などの調査研究活動の支援を継続するとともに、温暖化によって生じている自然の変化について普及啓発に力を入れます。 ○地質や古生物の研究を通じて、地史的な環境変化を明らかにし、伊那谷の成り立ちや日本列島の生物相の特性などについて明らかにしていきます。
人文	方針	○飯田下伊那の歴史や民俗芸能、文化財などを幅広く対象として、「文化の回廊としての伊那谷」の特質を明らかにしていきます。
	取組（●は重点取組）	●飯田市との合併20年を経て変容著しい遠山郷、および収蔵品が充実した田中芳男を中心に、研究者との連携や研究活動の支援も含めて、調査研究を進めていきます。 ○変化が著しい地域を選んで伊那民俗学研究所と協働して民俗調査を実施し、記録をしていきます。 ●各関係団体の構成員の高齢化が進む中で、活動が停滞しないよう連携を続けていきます。地元の研究団体や大学などと連携した調査活動により、若者の調査研究への参加を促進します。 ○「神楽」のユネスコ無形文化遺産登録に向けて、全国神楽継承推進協議会や南信州民俗芸能継承推進協議会、文化財保護活用課と連携し、協力していきます。 ○遠山霜月祭や地域の民俗・芸能を調査・記録する取組を継続し、保存継承、情報発信に繋がっていきます。
美術	方針	○菱田春草研究の拠点として、資料の調査研究を進めます。 ○伊那谷に展開した美術動向を調査研究し、伊那谷の芸術文化の特質を明らかにしていきます。
	取組（●は重点項目）	○菱田春草研究拠点として、作品研究と資料調査を行います。菱田春草についての資料集やデジタルアーカイブの作成・公開をめざし、春草生誕地ならではの春草研究を進めます。 ●郷土作家・地域コレクションの調査研究を行います。郷土の近現代美術について重点的に調査をおこない、また藤本四八についてはデジタルアーカイブ化を進めます。 ○市民や研究団体との協働による、地域の美術の再発見を行います。継続事業として、下伊那教育会菱田春草研究委員会との春草に関する共同研究、竜丘児童自由画保存顕彰委員会と協働し児童自由画に関する資料の調査と整理を行います。
プラ ネタリ ウム	方針	○プラネタリウムの利活用に関する調査研究を進めます。
	取組	○プラネタリウムに親しめる事業を行っている他施設の取り組みなどの情報を収集し、利活用につなげる研究を行います。

2. 資料の収集保存

(1) 現状と課題

開館以来、各分野に関連する博物館資料を収集保管してきました。自然分野では、植物・昆虫・動物の骨格標本・化石・岩石鉱物などを所蔵、人文分野では、歴史・民俗・考古や柳田國男、日夏耿之介、田中芳男など郷土の先人に関する博物館資料を所蔵し、なかでも田中芳男関連資料は収集が進み、全国でも有数な資料群を形成するようになりました。

美術分野では、「菊慈童」（長野県宝）、「春秋」などの菱田春草作品（含む飯田市指定有形文化財）を所蔵しているだけでなく、春草のスケッチ、下絵、書簡など多数の制作関連資料を所蔵しており、全国でも有数の菱田春草コレクション、春草研究資料センターとなりました。さらに、飯田ゆかりの寄贈コレクション（岩崎新太郎コレクション・綿半野原コレクション・井村コレクション・藤本四八撮影作品・須田剋太作品など）や郷土出身の作家の作品および資料を所蔵しています。

一方、博物館資料のデータベース化や収蔵品目録の作成を行っていますが、未整理資料もあり、市民や研究

者などにとって活用しやすい状態になっていません。今後は、デジタル技術を生かした情報公開を進めていく必要があります。また、近年、本市においても、地域コミュニティや個人が所蔵管理してきた文化財や美術品の寄贈、寄託の申し出が多くなり、博物館資料が増える傾向にあり、収蔵場所が不足してきています。収蔵品の保全と後世への継承は博物館の使命であり、収蔵場所の拡充が大きな課題となりつつあります。さらに、他の教育研究機関も類似資料を収集しており、市全体として、資料などの収集、保存、活用を図る方針の明確化や保管場所の整備などの対応が求められています。

（2）活動方針と主な取組

共通	方針 (再掲)	○「伊那谷の自然と文化」に関する特色あるコレクションを形成します。 ○「伊那谷の自然と文化」に関する学術研究の資料センターとしての機能を高め、デジタルアーカイブを充実させ資料の情報公開を行います。 ○博物館資料の増加や貴重な文化財などの保存に対処し、収蔵場所について、他の教育研究機関などと連携して確保していきます。
	取組 (●は重点)	●各分野の収集方針に基づいた資料の収集を継続し、収蔵資料のデータベース化を進め、デジタルアーカイブ化推進とともに公開活用を進めます。 ○文化財 IPM により、定期的なモニタリングを行い、収蔵資料の保存環境を整えます。 ●他の教育研究機関などと連携し収蔵場所の確保に努めます。
自然	方針	○地域の自然史資料と自然教育用基礎資料を中心に、博物館資料の充実を図ります。 ○伊那谷域で産出する自然資料、温暖化などで変化していく伊那谷の自然環境を記録するための資料、伊那谷の自然史資料を研究するための比較資料を収集します。
	取組 (●は重点)	●長谷川コレクションの利活用検討を継続し、追手町小学校化石標本室を長谷川コレクションの常設展示室として整備・管理していきます。
人文	方針	○伊那谷の歴史文化資料、田中芳男・日夏耿之介ほか郷土人関係資料を中心に収集します。 ○地域を幅広く学べる資料センターとしての機能充実に努めます。
	取組 (●は重点)	○多様な収蔵品の性質に配慮しながら保存管理に注力していきます。 ●地域や個人が管理収蔵し、散逸や消滅が懸念される文化財や重要資料の保存管理対策について、積極的に関わっていきます。 ●田中芳男をはじめとする収蔵品のデータベースを web 上で公開し、収蔵品の活用およびそれらの学術的な価値づけのための研究利用に寄与していきます。
美術	方針	○伊那谷の美術について欠かすことのできない作品、資料の収集、保存を進めます。 ○菱田春草の作品、春草に関わりのある作家の作品、郷土作家の作品、郷土美術に関する二次資料、郷土美術に関わる美術史に関する基本図書・学術雑誌を収集します。
	取組 (●は重点項目)	○菱田春草作品の増強と、基金の充実につとめ、2028 年度までに館蔵の菱田春草作品40点を目指します。 ●収蔵品の整理、目録化、データベース化をすすめるとともに、ICT を利用したデータベースの公開を目指します。特に館蔵品の画像をデジタル化し、画像付きデータベースを整備していきます。 ○顕彰団体や市民との協働により、伊那谷の美術資産の保存と継承をおこないます。
プラネタリウム	方針	○オリジナル番組データの適切な保存に努めます。
	取組	○データの適切な保存ができる環境を整えます。

3 展示公開

(1)現状と課題

当館は、自然分野と人文分野の常設展示を行うとともに、各分野の調査研究の成果や博物館資料を公開する企画展示などをほぼ毎年開催してきました。春草作品については、購入や寄贈、寄託により作品の充実を図り平成29(2017)年には、菱田春草記念室常設展示をスタートし、毎回テーマを持った展示を行っています。また、令和元(2019)年には開館以来の調査研究の蓄積を活用し自然・文化展示をリニューアルし「伊那谷の自然と文化」のガイダンスを充実しました。また、トピック展示コーナーを設けて、調査研究の速報的な発信も行い、当館に関わらず歴史研究所や図書館が所蔵する資料を展示することも行っています。

今後は、「伊那谷の自然と文化」のガイダンス機能を更に強化するために、随時更新を行いながら常に地域をアピールできるような常設展示を行っていくことが必要です。そして、企画展示などにおいては、「飯田の価値と魅力」を発信し、まちづくりや市民の学びのニーズに応える内容を中心に扱っていくこと、人々の知性、感性、感動を刺激し、創造をもたらす展示を行うことが求められています。また、展示公開と連動する教育普及の推進やデジタル技術の活用や展示解説の充実などを図り、展示公開を通じた学びや地域発信を深めていけるようにしていく必要があります。

(2)活動方針と主な取組

共通	方針 (再掲)	○「伊那谷の自然と文化」の特徴を紹介し、常設展示を通して「飯田の価値と魅力」を発信します。 ○調査研究成果を活用して、歴史的ならびに新たな視点に基づく展覧会を開催します。 ○人々の知性、感性、感動を刺激し、創造をもたらす展覧会、まちづくりや市民の学びに応える企画展示などを計画的に開催します。 ○多様な展示方法の導入や展示解説の充実を図り、わかりやすく楽しめる展示をめざします。
	取組 (●は重点項目)	○常設展示のトピック展示コーナーを活用し調査研究活動や資料収集の成果をタイムリーに発信できる展示を行います。 ○企画展示などは、「飯田の価値と魅力」を発信し、まちづくりや市民の学びに応えるよう、各分野や他の社会教育機関、市民団体などとの連携により企画力を強化します。 ●展示と教育普及を連動させ、多様な発信方法を導入して学習機能を高めます。 ○学校や地域の社会教育、市民学習団体などが展示を利活用できる仕組みや連携方法を検討し、整えていきます。 ○まつり伝承館「天伯」や遠山郷土館など、附属施設での展示公開を積極的に図ります。
自然	方針	○伊那谷の自然を身近に感じられ、よりよく知ることができる展示をめざします。
	取組 (●は重点項目)	○年3回のトピック展示更新、月替わりの身近な自然紹介パネルなどのほか、最新情報を伝えるパネルなどを設置し、変化ある自然展示室にします。 ●「伊那谷の自然の特徴や魅力」を紹介する企画展示などの計画的開催や、遠山郷土館などでのサテライト展示を行います。
人文	方針	○「交易と交流」という視点から「文化の回廊としての伊那谷」を紹介する展示に努めます。
	取組 (●は重点項目)	●南信濃村・上村合併 20 周年、田中芳男没後 110 年など、節目に合わせて時機に叶った展示を開催します。 ○実物資料を紹介するだけでなく、映像や蓄積されたデータなども交え、また関係者との共同作業に重点を置き効果的で観る者に響く工夫をしていきます。
美術	方針	○全国唯一の菱田春草常設展示の充実に努めるとともに、伊那谷の芸術文化の特質を明らかにし、新たな創造力を生みだす展示をめざします。
	取組 (●は重点項目)	○菱田春草研究の成果をもとに、春草を顕彰する常設展示を充実させるとともに、企画展示などを計画的に開催し、菱田春草を顕彰します。

	重点項目)	○郷土に関わりのある作家や伊那谷の美術の特色と魅力を伝えるコレクション展示や企画展示などを開催します。 ●感性、感動を刺激し、地域の創造力を高める展覧会、美術作家と地域をつなぐ展覧会を開催します。実行委員会と協働して開催している「現代の創造展」を継続し発展させるなど、現代の美術を発信する展覧会を拡充します。
プ ラ ネ タ リ ウ ム	方針	○一般投影、学習投影、予約投影、特別投影によって、天文学宇宙に親しみ、学習できる機会を提供します。
	取組（●は重点項目）	○魅力的な番組による一般投影、予約投影、特別投影を行います。 ○最新の情報による学習投影ができる番組を提供します。 ●子育て世代が、こどもとともに手軽に訪れることのできる施設として、天文学宇宙を楽しみながら学べる番組を提供します。 ●鮮明な映像で番組を継続して提供できるよう投影機器のメンテナンスを行い、機器の保全や必要に応じて更新を進めます。

4. 教育普及

(1) 現状と課題

開館当初から市民団体などと協働して、分野ごとに調査研究の成果を裏付けにして、年 100 回ほどの講座・講演会・ワークショップなどを行ってきていますが、近年、講座形式の教育普及事業への参加者の固定化や減少といった状況が進んでいる一方で、参加型あるいは体験型、出前型の教育普及事業への要望は増えています。しかし、コロナ禍を経て、教育普及事業のスタイルに変化が生じており、大人数の集客を目指すものから、細かなニーズに応える満足度の高い講座が求められるようになりました。また、配信の活用などデジタル技術を用いて来館しなくても講座に参加できるシステムも構築されました。

講座の内容については、市民が、「伊那谷の自然と文化」の特徴や価値をはじめ、田中芳男や菱田春草などの郷土の先人について、知り、語り、誇れるような学びを提供していくことが大切になっています。

こうしたことから、今後の教育普及においては、講座などの内容や回数を精選する一方、体験型や参加型、出前型の拡充、展示公開との連動、分野間や他の教育研究機関と連携した企画、他分野とのコラボレーションによる企画、配信の有効な活用など、市民の学びの多様化に対応した内容や方法を工夫していきます。市民の共創の場としての整備と、専門性の高い教育研究機関として、学校教育と連動、支援していく取り組みも進める必要があります。

さらに、本館の特色でもある美術分野、自然科学分野、人文分野を活かし、それぞれの分野を横断する視座を持ち、STEAM 教育を軸にした科学技術とアートの視点を大切にしていきます。

(2) 活動方針と主な取組

共通	方針（再掲）	○市民の学びの多様化に対応した取組を工夫するとともに、学び合いの場としての機能を高めていきます。 ○魅力的で質の高い学習プログラムを開発して、こども達への学びを提供するとともに、地域の文化活動への支援を行います。 ○学芸員の持つ専門性や情報網、人脈をいかして、他の教育機関などと連携した質の高い教育普及活動を進めます。 ○領域横断的なプログラムに取り組めます。
	取組（●は重点項目）	○地域の課題や市民の学びに応える魅力的な講座や講演会を、デジタル技術などを組み合わせ開催します。 ●学校の授業に沿った学習や調査研究の成果をこどもたちの学びや地域づくりに生かせるようなプログラムを研究、実践します。 ○市民の主体的な学びに応える支援を行います。

		○市民ガイドの養成などに取り組みます。
自然	方針	○オリジナルな教材や現地を利用し、「伊那谷の自然」や科学に関する学びが深まるような教育普及活動を展開します。 ○環境学習や防災教育につながっていく教育普及活動を継続的に行います。
	取組（●は重点項目）	○こども向けの科学工作教室、ワークショップなどを企画し実施します。 ○伊那谷自然友の会と連携した観察会や行事の開催を継続します。 ○公民館、天竜川総合学習館、子どもの森公園などと連携した取り組みを推進します。 ●環境課などと連携した南アルプスユネスコエコパーク、南アルプスジオパークの普及活動や環境教育、危機管理室と連携した防災教育の支援をおこないます。
人文	方針	○歴史や民俗芸能、文化財など様々なテーマから「伊那谷の文化」を学べる教育普及活動を展開します。
	取組（●は重点項目）	●田中芳男の顕彰について、学校利用に際して、可能な限り展示室を案内する機会を用意するとともに、情報発信や展示方法を工夫します。 ○藤本四八を顕彰する小中学生写真賞を継続し、応募件数については現状を維持していきながら、内容の見直しも視野に入れて事業を実施します。 ○「飯田・城下町サポーター」とともに、見学会などの協働事業を継続して行います。 ○学校の担当者が代わっても継続できるような体制をつくるとともに、事務作業の効率化に努めます。 ○美術博物館の活用方法を小中学校と共有し、飯田大火や飯田城など、飯田に赴任した先生方に知っていただきたいテーマを研修内容に組み込んでいきます。 ○古文書講座は引き続き会場を美術博物館とし、講師は歴史研究所のスタッフを主軸として実施します。
美術	方針	○菱田春草の研究拠点にふさわしく、また、伊那谷の芸術文化の振興に寄与する教育普及活動を展開します。
	取組（●は重点項目）	○様々な方法により菱田春草に関する教育普及活動を推進します。特に春草講座の実施や、複製画を用いた鑑賞教育による展示を開催します。 ●複製画を用いた出前鑑賞授業を実施し、学校での美術の授業や郷土の美術家を学ぶ時間に協力します。また事業の充実のため飯田市が所蔵する代表作「菊慈童」の複製画の作成について検討します。 ○美術講演会、シンポジウム、実技講座などにより地域の創造力を高め、伊那谷の美術に刺激を与える講座を開催します。 ○子ども美術学校の開催や中学生造形教室などだ、小中学生を対象としたワークショップを開催し、次世代の表現力を高める取組を展開します。 ○市民ギャラリーの活用などにより、市民の芸術活動を支援します。
プラネタリウム	方針	○観望会や講演会により天文学教育を行います。 ○天文学に親しむ人々がプラネタリウムに集い、学習を深められる場を作っていきます。
	取組（●は重点項目）	○天文分野の今を発信する研究者などを招いて天文講演会や講座を実施します。 ●観望会やプラネタリウムまつりなど、親子で参加でき天文に親しむための教育普及活動を行います。 ○世代を問わず、誰もが天文学を学ぶ機会を提供します。

5. 学芸活動の体制

(1) 現状と課題

開館以来、学芸員を順次採用してきており、令和7(2025)年4月現在、自然分野2人(生物・地質)、人文

分野2人(民俗・仏教文化)、美術分野2人(美術全般・近現代美術)の計6人が在籍しています。また、会計年度任用職員として、自然分野で2人、人文分野で1人、美術分野で1人、プラネタリウムで2人の計6人の専門研究員が在籍しています。

今後は、学芸活動の継続と発展に向け、学芸体制の維持を計画的に図るとともに、新規採用学芸員の育成システムを整えておくことも重要になります。

また、博物館法の改正などにより、学芸員等は、まちづくりの支援者としての役割や他の社会教育機関などとの連携の推進が期待されるようになっており、研究員には学校教育などを補完、支援する役割が期待されるようになってきています。こうしたことを踏まえて、学芸員等と専門研究員の役割分担と協力連携のあり方を整えておく必要もあります。

なお、体制の整備については、文化財保護活用課、飯田市歴史研究所との関係なども視野に入れて検討する必要があります。

(2)活動方針と主な取組

方針	○学芸活動の継続と発展を支える体制を確保し、市民の学びやまちづくりを支援できる取組を持続します。 ○専門職種の役割分担と連携を柔軟に行い、当館の基本テーマに即した活動に取り組めます。 ○学芸員など及び事務職員の研修を行い、博物館活動とともに館のマネジメントに携わる人材の養成を行います。
取組 (●は重点項目)	○学芸活動における自然・人文・美術の3分野体制と、各分野における研究領域を維持し、これまでの蓄積を継続発展させられる学芸員などの確保と育成体制を整備します。 ●展示公開や教育普及において、他の社会教育施設や分野間が連携する体制を整え、企画や事業のマネジメントを行います。

6. 管理運営業務

(1)現状と課題

当館の観覧料は、消費税率の改正に伴う改訂を行ったほかは、開館以来の水準を維持し、特別展などの料金もできるだけ低く抑えるとともに、教育普及活動は原則無料で行っています。また、平成20(2008)年に「びはく年間パスポート会員」の募集を開始しました。パスポート会員の利用状況は、全国の類似施設と同水準を維持しています。さらに、平成 21(2009)年3月からロビー空間を無料化、令和6(2024)年3月から高校生以下の展覧会観覧料を無料化し、訪れやすい施設として利用者サービスの向上や改善に努めています。

しかし、近年、少子化や人口減少、類似施設の増加などによって、ピーク時に7万人余であった入館者数が、前期4年間は4万人余で推移している状況でありましたが、中期5年間はコロナ禍や施設工事による休館期間があり3万人余となっています。今後の社会情勢や当地域をとりまく交通体系による人的交流や物流の変革を見ずして、開館時間や観覧料体系の見直しなどが必要になっています。

施設の管理においては、築後35年を経過した建物や設備機器の改修や更新が大きな比重を占めるようになってきており、計画的に対応していくことが求められています。なお、ポストモダン建築である本館や国の登録有形文化財に登録された柳田國男館は、建物それ自体が文化財であるため、その維持管理には価値を損なわないよう配慮する必要があります。

(2)活動方針と主な取組

方針	○市民に親しまれ必要とされるように、魅力的な空間の提供、サービスの充実向上を図ります。 ○飯田下伊那地域への人の流れを生かせるよう、戦略的かつ積極的に質の高いPRや情報発信の強化を図ります。 ○計画的な施設設備の整備を進めていきます。
取組	○web などを活用して PR 活動の範囲や対象を広めていくとともに、海外からの観覧者も意識した情報発

（●は重点項目）	信方法の工夫、改善に努めます。 ○計画的な施設・設備の改修・更新とプラネタリウム機器などの更新について検討を進めます。 ●他の社会教育機関と連携して増加しつつある博物館資料の収蔵保管に必要なスペースの確保に向け検討します。 ○社会情勢や全国の類似施設の状況を参考にして観覧料や講座参加者の負担金、開館時間などについて検討し、必要な見直しを行います。 ○年間パスポート制度について、会員特典の見直しや更新方法の改善などを行いながら、会員の維持拡大を図ります。 ○遠山郷土館およびまつり伝承館「天伯」・ねぎやの今後の活用について、検討していきます。
----------	--

7. 多様な主体との協働や研究教育機関などとの連携

（1）現状と課題

博物館は、学術的な成果を利用者が様々な学びを通して知識を深め、自己実現や課題の解決に活用するための施設です。当館は「伊那谷の自然と文化」について、専門的に調査研究し、価値を見だし、展示や講演会、番組投影などを通じて皆様にわかりやすくお伝えします。そして多くの住民が博物館につどい、未来を語り合い、時にはつながりながら地域の様々な課題を解決するための場になることを理想としています。

このために、同じような目的を共有する図書館や歴史研究所などとの連携を深め、市民の学びのための環境を整備していきます。研究活動については、多様な学術研究・教育機関と連携し、学際的な活動によって地域の価値を明らかにすることが求められています。また、まちづくりのために活動する多様な主体の方々との協働することも必要とされています。

（2）活動方針と主な取組

方針	○地域の自然の保全活動や文化財の保存活動を行う市民団体と協働し、事業を進めるための助言や支援を行います。 ○「伊那谷の自然と文化」の調査研究と保存活動を行う研究者や研究団体と協働し、事業を進めるための支援を行います。 ○飯田市歴史研究所や飯田市立中央図書館などとの役割分担と連携を図り、学術研究・教育機関の一翼を担うとともに、学校教育機関や公民館などとの連携のあり方を整えていきます。 ○周辺地域にある類似施設などとの連携や共同事業を進めます。
取組（●は重点項目）	●「伊那谷の自然と文化」に携わる研究者や団体と連携し、地域研究や保存継承活動の活性化を支援します。 ○飯田市歴史研究所や飯田市立中央図書館などと連携し、学術研究・教育機関の機能強化に向けて検討していきます。
連携協働の組織など	学校教育課 生涯学習・スポーツ課 文化財保護活用課 飯田市立中央図書館 飯田市各地区公民館 下伊那教育会 伊那谷研究団体協議会 学輪 IIDA 県内外の美術館・博物館 大学など 【自然分野】環境課 ジオパーク協議会 信州大学 ふじのくに地球環境史ミュージアム 長野県環境保全研究所 天竜川総合学習館（公財）南信州・飯田産業センター 伊那谷自然友の会 など 【人文分野】飯田市歴史研究所 南信州民俗芸能推進協議会 柳田國男記念伊那民俗学研究所 伊那史学会 長野県立歴史館 など 【美術分野】飯田市歴史研究所 菱田春草顕彰団体 地域美術振興団体 長野県立美術館 飯伊美術家・美術団体の会 など 【プラネタリウム分野】生涯学習・スポーツ課 飯田御月見天文同好会 宇宙に一番近い長野県推進協議会（公財）南信州・飯田産業センター など

第5章 飯田市美術博物館 2028 基本プランの展開

「飯田市美術博物館 2028 基本プラン」は、計画期間を前・中・後期の3期に分け、各期を迎えるごとに具体的な取組を定めて展開していくこととし、本計画の上位計画である「第2次飯田市教育振興基本計画」が定める活動指標により、各期の取組状況を評価していきます。

本章では、前期・中期・後期の各期における達成目標と重点的な取組および前期の取組と活動指標を示します。

1. 前中後各期の達成目標と重点的な取組

期別	達成目標と重点的な取組（前期：取組状況）
前期	【目標】展示の魅力アップと活動体制の整備強化 ・平成 29(2017)年 9 月には念願であった「菱田春草記念室常設展示」をスタート。以後、26 期の展示を行い春草生誕地で常に春草作品を観覧できる環境を整えました。 ・令和元(2019)年7月に開館からの調査研究の蓄積を活かし「自然・文化展示」を更新しました。併せて、「トピック展示コーナー」を設置し講座との連携やタイムリーなテーマを取り上げるなどして展示の魅力向上を図りました。 ・学芸体制の確保にあたっては、期間中2名の学芸員を採用しました。
中期	【目標】来館者に親しまれ、学びの多様化に対応する教育普及活動と情報提供環境の構築を図ります ・オンライン環境の整備が進み、講座・講演会では録画配信、オンラインなど配信方法についてさまざまな試みを行いました。 ・伊那谷自然友の会、柳田国男記念伊那民俗学研究所、下伊那教育会郷土調査部、竜丘児童自由画保存顕彰委員会などと連携して調査研究、学習活動を行いました。また「飯田・城下町サポーター」の立上げ美術博物館を活用する関係人口を増やす試みをおこないました。 ・『文書目録』（Ⅰ～Ⅹ）に掲載された所蔵の古文書の web 上で公開を開始しました。 ・トイレのセンサースイッチ化、センサー水栓化、美術博物館特定天井耐震補強工事、照明器具LED化改修工事、熱源チラー更新工事などを実施し、施設の安全強化と長寿命化を図りました。 ・レジスターのキャッシュレス化、自動釣銭化を行い来館者への便宜を図りました。
後期	【目標】飯田の価値の学びの一翼を担う教育普及活動及び資料センター活動の推進 ・市民や各学術研究・教育機関との協働を拡充し、学びの多様化とまちづくりに応える取組を進めます。 ・収蔵場所の確保に努め、博物館資料などの保存に努めます。 ・デジタル技術を活用して、博物館資料の情報公開や展示、教育普及での発信力を強化します。 ・博物館活動を継続して行えるように施設や体制を整え、市民誰もが集い学ぶ開かれた場としての機能を高めます。

2. 後期 4 年間(令和 7～10 年度)の主な取組と活動指標

(1)後期 4 年間の主な取組

2028 基本プランの後期 4 年間の各活動分野の重点取組(●)を再掲しています。

活動分野	主な取組
調査研究	●適時適宜に「伊那谷の自然と文化」を調査研究し、その成果を発表するとともに、デジタル技術を活用しての発信を促進します。【共通】 ●南アルプスユネスコエコパーク・南アルプスジオパークの保全活用に向けた基礎研究を今後も継続するとともに、南アルプスの特性をより明確にするために、近隣の山岳(中央アルプス、ハケ岳、北アルプスなど)の調査を行い、比較のための資料を収集します。【自然】 ●飯田市との合併 20 年を経て変容著しい遠山郷、および収蔵品が充実した田中芳男を中心に、研究者との連携や研究活動の支援も含めて、調査研究を進めていきます。【人文】 ●各関係団体の構成員の高齢化が進む中で、活動が停滞しないよう連携を続けていきます。地元の研究団体や大学などと連携した調査活動により、若者の調査研究への参加を促進します。【人文】 ●郷土作家・地域コレクションの調査研究をおこないます。郷土の近現代美術について重点的に調査をおこない、また藤本四八についてはデジタルアーカイブ化を進めます。【美術】
資料の 収集保存	●各分野の収集方針に基づいた資料の収集を継続し、収蔵資料のデータベース化を進め、デジタルアーカイブ化推進とともに公開活用を進めます。【共通】 ●他の教育研究機関などと連携し収蔵場所の確保に努めます。【共通】 ●長谷川コレクションの利活用検討を継続し、追手町小学校化石標本室を長谷川コレクションの常設展示室として整備・管理していきます。【自然】 ●地域や個人が管理収蔵し、散逸や消滅が懸念される文化財や重要資料の保存管理対策について、積極的に関わっていきます。【人文】 ●田中芳男をはじめとする収蔵品のデータベースを web 上で公開し、収蔵品の活用およびそれらの学術的な価値づけのための研究利用に寄与していきます。【人文】 ●収蔵品の整理、目録化、データベース化をすすめるとともに、ICT を利用したデータベースの公開を目指します。特に館蔵品の画像をデジタル化し、画像付きデータベースを整備していきます。【美術】
展示公開	●展示と教育普及を連動させ、多様な発信方法を導入して学習機能を高めます。【共通】 ●「伊那谷の自然の特徴や魅力」を紹介する企画展示などの計画的開催や、遠山郷土館などでのサテライト展示を行います。【自然】 ●南信濃村・上村合併 20 周年、田中芳男没後 110 年など、節目に合わせて時機に叶った展示を開催します。【人文】 ●感性、感動を刺激し、地域の創造力を高める展覧会、美術作家と地域をつなぐ展覧会を開催します。実行委員会と協働して開催している「現代の創造展」を継続し発展させるなど、現代の美術を発信する展覧会を拡充します。【美術】 ●子育て世代が、こどもとともに手軽に訪れることのできる施設として、天文宇宙を楽しみながら学べる番組を提供します。【プラネタリウム】 ●鮮明な映像で番組を継続して提供できるよう投影機器のメンテナンスを行い、機器の保全や必要に応じて更新を進めます。【プラネタリウム】
教育普及	●学校の授業に沿った学習や調査研究の成果をこどもたちの学びや地域づくりに生かせるようなプログラムを研究、実践します。【共通】 ●環境課などと連携した南アルプスユネスコエコパーク、南アルプスジオパークの普及活動や環境教育、危機管理室と連携した防災教育の支援をおこないます。【自然】 ●田中芳男の顕彰について、学校利用に際して、可能な限り展示室を案内する機会を用意するとともに、情報発信や展示方法を工夫します。【人文】

	●複製画を用いた出前鑑賞授業を実施し、学校での美術の授業や郷土の美術家を学ぶ時間に協力します。また事業の充実のため飯田市が所蔵する代表作「菊慈童」の複製画の作成について検討します。【美術】 ●観望会やプラネタリウムまつりなど、親子で参加でき天文に親しむための教育普及活動を行います。【プラネタリウム】
活動体制	●展示公開や教育普及において、他の社会教育施設や分野間が連携する体制を整え、企画や事業を行います。【共通】
管理運営	●他の社会教育機関と連携して増加しつつある博物館資料の収蔵保管に必要なスペースの確保に向け検討します。
多様な主体	●「伊那谷の自然と文化」に携わる研究者や団体と連携し、地域研究や保存継承活動の活性化を支援します。 ○飯田市歴史研究所や飯田市立中央図書館などと連携し、学術研究・教育機関の機能強化に向けて検討していきます。

(2)後期4年間の活動指標(第2次飯田市教育振興基本計画の活動指標)

後期4年間の活動指標として、「第2次飯田市教育振興基本計画」において、当館の事業が位置付けられている【取組の柱11「伊那谷の自然と文化」の学究・普及・継承・活用を推進する】の活動指標を準用します。

なお、「第2次飯田市教育振興基本計画」では、活動指標を前中後の各期に設定します。

		独自で、多様で、奥深い「伊那谷の自然と文化」をテーマに、市民研究団体などと協働して学術研究、教育普及、保存継承活動を進めるとともに、地域づくりや魅力ある生活文化の創造・発信につなげる取組を推進します。		
目 標 値	指標名	現状(R1年度)	現状(R5年度)	目標(R9年度)
	住んでいる地区や飯田市の自然・歴史・文化・風土などに誇りや愛着がある人の割合【市民意識調査】 (%)	69.2	75.4	
	文化活動を1回以上行っている人の割合 (%)	63.9	59.1	
	美術博物館来館者数 (人)	44,442	30,938	45,000
	講座など参加者数 (人)	6,235	6,546	6,500
	展覧会・市民ギャラリーの観覧者数 (人)	49,758	31,700	50,000